

第4回専門職大学基本構想策定委員会の開催結果について

1 日 時 令和元年10月24日（木） 14:00～16:00

2 委員会出席者

○会長 生源寺眞一（福島大学食農学類長）

○委員

今井敏（(独) 農林漁業信用基金理事長）、小沢互（山形大学農学部教授）、嶋村和恵（早稲田大学商学学術院教授）、野堀嘉裕（山形大学名誉教授）、五十嵐一雄（山形県認定農業者協議会会長）、早坂和紀（早坂果樹園）、阿部多喜子（金山町森林組合森林施業プランナー）、遠田勝久（(有) 遠田林産代表取締役）、今田裕幸（山形県農業協同組合中央会常務理事）、阿部清（(公財) やまがた農業支援センター専務理事）

3 会議の概要

事務局から「専門職大学基本構想（案）」及び「専門職大学に係るアンケート調査の概要」について資料により説明の上、意見交換を行った。

【主な意見】

○教育研究の内容について

- ・教員が本来的に必要なものとするもの、学生達の反応は違う。学生に合わせすぎても、教員が理想と思うことを強要してもダメ。双方の思いをどうつなげるのか、カリキュラムの検討ではそれが大事。場面場面で成長していくような教育課程にしていけないと上手くいかない。
- ・総合科目では、一人の教員が少人数の学生を受け持つゼミ形式の演習があると有効ではないか。
- ・卒論について、専門職大学では、自分で課題を見つけるかたちにして、できれば地域で課題を見つけ、地域と一緒に課題を解決していく、地域とつながった成果にして卒業できると良いのではないか。そうしたことも、専門職大学の特徴の一つにしていけたら良いと思う。
- ・英語の科目など、こちらが良いと思って学生に提示しても反応が無いということがある。学生は楽な方に流れるということが現実的にあるので、こういう勉強をしたら将来どうなるんだという長期的な見通しが立つような、学生像や卒業生像が分かるような組立をしていってほしい。
- ・地域で農業をすることは農業経営をするだけではなく、農村文化を守っていくことが重要。宗教が違うからその地域の祭りに参加しないとといった考えでは、その地域の文化が崩壊してしまう。地域で農業をするイコール地域文化も一緒に守る、継いでいくということが重要なので、その教育も必要。
- ・林業について、時代は流れており、前は十年一昔であったが、林業では今は三年あるいは二年一昔で、スピードに追いつかない。専門職大学では、変化のスピードに対応できるカリキュラムにして欲しい。

- ・雇用就農や新規参入、親元で働いてから経営者になっていくなど様々なケースがあるので、それを念頭に置いたカリキュラムの検討が必要。
- ・時代や若い人が変わっていく中、中身をどう充実していくか、それが教育に携わる人の責務。

○県内定着に向けた学生への支援について

- ・できれば学生募集をする段階で具体案を示せるように、スピード感を持って検討して欲しい。専門職大学の魅力度を高めることにもつながり、特色にもなる。
- ・県内定着に向けた学生への支援で、「学費負担を軽減し、そして県内に定着してもらおうため」とあるが、学費負担の軽減と県内定着は直接的には結びつかない。少し文言を修正すれば、高校生が読んでも説得力ある文章になるのではないか。

○アンケート調査の結果について

- ・基本構想で英語力の修得を打ち出しているのは良いが、アンケート調査の結果では、農林業経営者からは外国語能力やグローバルな感覚を備えた人材への期待が低い。結果は素直に受け止めつつ、経営者は卒業生の受け皿になる側なので、どのような人材の輩出を期待しているのか、経営者の要望を更に聞きながら、一方でカリキュラム内容を経営者に理解してもらう双方向の取組を行い、ギャップを埋める努力をしていく必要があるのではないか。
- ・「進学先の候補として検討したい」と「現時点ではまだわからない」、「進学を希望しない」の回答が非常に似通っている。高校生はその時の気分で回答してしまうという、不安定なところがあると捉えることもできる。高校生の中には、それまであまり農学への進学を思っていなかったけれども、大学教員や高校の先生の話聞いて農学への進学を考え始める生徒も多い。このため、普段から入学者確保の努力をする必要がある。
- ・経営者アンケートで、英語教育が必要という回答が少なかったが、答えた経営者が全て英語や中国語を話せれば、必要という割合はすごく高くなったのではないか。私も東南アジアからアフリカまで、短期や長期の学生を受け入れてきたが、そういう人たちと一緒に仕事をすると、我々が英語を話せないと全然仕事にならない。技能実習生が県内にたくさん入ってくる中で、その人達を使うためにも、英語能力はすごく必要。専門職大学では、英語に力を入れて欲しい。
- ・専門職大学の卒業生を採用したいと思っている農業経営者が結構いるが、卒業生を受け入れたいと思っているだけではダメで、研修プログラムや人材育成の考え方を個々の農家さんが持っていないとダメだと思う。研修プログラムや人材育成がピンと来ない人もたくさんいると思うので、専門職大学設置と同時に、一般の農業者も人材育成についてレベルアップして、県全体で人材育成に取り組む気運が高まると嬉しい。
- ・農林大学校の学生はたくさん実習をしているのに、専門職大学ができたらまだ実践がしたいという結果が出ている。実践をしたい学生にも魅力的な授業を作っていたきたい。また、実践をしたい高校生が専門職大学に入って、4年間勉強して卒業してくると思うと、採用側が学生に負けないようにしないといけない。
- ・「山形県の農林業系専門職大学に進学してみたい」と回答した高校生の県ごとの比率を見ると、青森や宮城、秋田は若干低い山形県並の比率が出ている。設立に向け良い材料だと思うので、上手く活用できれば良い。

- ・教育内容を検討する上で、アンケート調査の対象は色々な経営形態があるので、今後、可能な範囲で経営形態ごとの分析をすれば別の見方ができるのではないか。
- ・アンケートでは、雇用就農の意向を聞いているが、基本構想（案）の「教育研究の内容」では、自ら経営者になっていく姿を想定した目標が多く含まれているので、あまり雇用就農のアンケート結果に引きずられないようにお願いしたい。

○専門職大学の学生への周知方法について

- ・専門職大学のイメージはつかみにくいので、外から見て分かるように提示していくことが必要。スーパートップランナーがどうあるべきかということを考えて、どういう学生が入ってきて、その学生がどういう風に成長していくのか、より具体的につかめるものを提示していくというやり方が良いと思う。
- ・出口を想定し、それを具体的に示すことで山形県の専門職大学が上手く伝わる。それは入口の魅力にもつながると思う。

○その他

- ・入学定員は概ね妥当だと思う。専門職大学と農林大学校の定員を合計（80名）すると、現在の農林大学校の定員（60名）より増えるため、学生の募集活動をしっかり行うとともに、専門職大学の魅力を高めることで全国から学生を引きつけることにより、増加分は追加で獲得するんだという強い意識で、魅力づくり、特色づくりを考えて行って欲しい。
- ・開学に向けては、募集時にはすべてが決まっているよう、スピード感を持ってやっていただきたい。

以上